

次の日『マナ』を会社に行くのを見届けた『のら』は、そそくさと家の中に消えて行った。やがて部屋の中から『コンコン』という鈍い音がし始めた。

『のら』は『マナ』のパソコンに向かい、キーと言われる部分を一生懸命叩いていた。しかし何故か、『マナ』がやっていたような綺麗な画面は現れず、何時までたっても真っ黒な画面のままであった。『のら』は「おかしいな」と言っ、じっとキーの変な文字を見ていた。『のら』は「うん」と言っ、端から順番にキーを押し始めた。しかしよく見ると、『のら』の手はズングリしていて一つ一つは押せずに、7個ぐらい同時に押せていた。そんなことは気にしない『のら』は、どんどん順番に押し続けた。やがて最後のキーを押したにも係わらず、画面は現れなかった。『のら』はまたじっとキーを眺め始めた。すると、『のら』は、右上に色の違うキーが一つあることに気付いた。「うん、うん」と大きくうなずき、ニコニコしながらそのキーに手を伸ばし、思いつき叩いた。しかし画面は反応しない。よく見ると、『のら』の手はキーを押せていない。そのキーは何故か、周りに少しへこんでいた。『のら』のズングリした手では、押せなかったのである。『のら』はまたじっとそのキーを見ていたが、やがて周りを見渡し始め、台所へと向かって行った。戻ってきた『のら』の手には、『マナ』の箸がしっかりと握られていた。その箸の先端で、『のら』はキーを押した。次の瞬間画面に文字が現れ、パソコンが動き始めた。暫くして画面の動きが止まった。じっと待ったが動かない。再びキーを叩いたが、いくらやっても動かない。やがて『のら』は飽きたのか、あくびをして寝床へと向かった。

